

殿という祭祀場がある。またこの集落は三家が村立てをしたと伝承されている。こうした拝所数と村落創始家の数から、稻福は三つの祭祀集団が統合されたと考えられている。当遺跡群は集落の拝所付近に形成され、年代的にも稻福集落と連続するのでその初期集落跡と考えられる。各拝所と遺跡の位置関係は、稻福集落の創始家や稻福殿がある一帯が稻福殿遺跡、上御願一帯が上御願遺跡、仲村御獄一帯が仲村御獄遺跡である。

一九六九—七四年(昭和四四—四九年)にかけて稻福遺跡群と稻福集落の歴史的関係を調べるための考古学的調査が行われた。その結果、上御願遺跡は一三一—四世紀の集落跡、稻福殿遺跡は一四一—五世紀の集落跡であることが判明し、仲村御獄遺跡も採集された遺物から一四世紀の集落跡と推定されている。一三世紀に上御願遺跡の集落が形成され、一四世紀には稻福殿遺跡と仲村御獄遺跡の各居住地が登場して三つの居住地から構成された集落となつたが、一四世紀後半頃に稻福殿遺跡に集落統合され、さらに一五世紀には集落編成されて沖縄戦前の稻福集落の原型ができるがたと考えられる。稻福遺跡群の中心的遺跡である上御願遺跡は、大型建物と広場を中心にして住居・倉庫・鍛冶場・祭祀場があり、稻福遺跡群の首長層の居住区と考えられている。稻福殿遺跡の発掘では一四世紀の屋敷跡、一五世紀の倉庫跡、一六一〇世紀の石組祭祀場遺構が出上している。

### 上御願遺跡

④大里村大城

稻福集落の御獄である上御願(山グスクとも)一帯にある一三一—四世紀の集落遺跡。標高約一八〇メートルの丘陵上に分布する稻福遺跡群の中心的遺跡で、丘陵頂部から南斜面にかけて約一〇〇〇平方メートル余の範囲に形成されている。一九七一—七四年(昭和三九—四六年)と八年に発掘調査が行われた。石積みなどの防護施設は確認されていないが、居住地を囲む柵などの防護施設があつた。

となり、九六年からは島尻郡に所属。一九〇七年勅令第四五号の施行により一八八年一月一日には大里間切を大里村と改称。同年四月一日大里村に冲縄県及島嶼町村制を施行。一八八六年首里一与那原間を結んだ与那原街道が整備され、一九〇八年与那原—西原街道が竣工。一四年(大正三年)には県官鉄道与那原線が開通し、一五年糸満一与那原街道全線が竣工した。大里村からの分離についての議論が二八年(昭和三年)頃からち上がり、四四年には町制施行が実現しそうになつたが、第二次世界大戦のため中断され、沖縄戦後再び機運が盛り上り、四九年には与那原・上与那原・板良敷の三字を大里村から分離して町制を施行、町名を与那原町とした。文化財は三津武戸・久葉堂・久場塘・東名大主・宗之増・久茂久地があり、大里・佐敷・知念・玉城の聖地を巡拝する東御廻り(アガリウマーリ)のコースの御殿山や親川がある。約四〇〇年の伝統をもつといわれる与那原大綱引が旧暦の六月に与那原まつりのメインとして行われる。

### 与那原町 ⑤与那原町と那原

大里間切の北端に位置し、北は西原間切(我謝村(現西原町)、南は上与那原村・板良敷村、西は南風原間切宮城村(現南風原町)、東は海に面する。「おもろさうし」卷一

の九三に「一 こいのかくに いけくし(コイシノ「神女」が国を賑わせ)／又 とゝろきのくに いけくし(神女が國を賑わせ)／又 五たけのくに いけくし(五

ラス「神女」が國を賑わせ)／又 よなはるのくに いけくし(与那原の国を賑わせ)／又 めつらしや るくに いけくし(素晴らしいよい國を賑わせ)／又 サうさしや るくに いけくし(嬉しいよい國を賑わせ)」とある。コイシノとマチラスと一緒に久米島の神女が与那原を靈的に祝福したもの。「いげくし」「島連れ」「國連れ」「み物」が各節に繰返さ

分が発掘され、その内部構成が明らかくなっている。集落の最上位に建つ大型建物とこれに相対する一〇〇平方メートルほどの広場を中心に、周辺に住居・倉庫・祭祀場・鍛冶場がある。おもな出土遺物は多量の輸入陶磁器、土器、炭化米・麦、獸骨・貝殻などの日常生活遺物ほかに、鉄鎌・釣針・鉄斧などの生産用具、勾玉や玉などの祭祀具、鐵鍔・刀の鍔・鎧の留具などの武器・武具類、

鏡や調度品の飾金具など多彩な内容である。こうした遺物・遺構から上御願集落は大型建物に居住して立派な調度品をもち、鎧で武装した稻福遺跡群の首長的な人物や祭祀をつかさどる司祭者の人物のはかに、農業・漁労・鍛冶などの生産労働に従事する労働者などからなる数家族規模の集落と考えられる。「おもろさうし」には、稻福に立派な建物が建てられたこと(卷一七の四七)、テダ(太陽)とよばれて畏敬された人物に、周辺の集落から鎧をまとった部下を引連れた者が拝謁する情景が描かれている(卷一七の四五)。この集落は大型建物と広場、テダとよばれる首長的人物の居住を重視すると、首長とそな一族が居住する「居館」とよぶのが妥当であろう。

### 真境名村

⑥大里村大城

大里間切の東部に位置し、南は稻福村、北は西原村、東は佐敷間切小谷村(現佐敷町)。絵図郷村帳・琉球國高究帳に島添大里間切「まざけな村」とあり、「琉球國由来記」には大里間切真境名村とみえる。高究帳によると高頭四石余うち田三六石余(うち永代荒地五斗余)・島八石余。間切集成図には西原村の南に並んで描かれ、集落内に樋川がみえる。馬場(長掌原馬場)が集落の後方近くにある。当村を領した地頭職には康熙一三年(一六七四)に翁氏六世翁宗璉娶親雲上盛武が任じられ(翁氏永山家譜、乾隆二年(一七五七)に向氏真境名親雲上朝孝がいた(中山世譜附卷)。廢藩の頃は真境名盛福がいる(家譜資料)。

石窟(はくく)三日かの間作業して石窟の内に詰められた。前掲由来記によると与那原ノロの崇所として名を挙げるだけで贊美することを意味している。なお「国」は「島」の対語としても使われているように、集落程度の規模をさしている。

絵図郷村帳・琉球國高究帳には島添大里間切与那原村とあり、「琉球國由来記」には大里間切与那原村とみえる。高究帳によると高頭四八〇石余、うち田三三五石余(うち永代荒地三五石余)・島一五五石余。近隣の上与那原村や大見武村の高も含むものと思われる。惣地頭が与那原を家名とする(向姓辻士名家家譜など)。間切集成図には、上与那原村とひと続きに他村とは比較にならないほどの大村として描かれている。首里からの道筋が南風原間切を経て西側の大見武村を通り、親川の場所に出て西原間切から海岸沿いに南下した道筋と合流し、本番所に至る。

集落内には親川とは別の井もある。西原間切に向かう道は卯下小間右に当たる。古くから交通・交易が盛んであつたといわれ、「球陽」尚巴志王元年(四二二)条によると、佐敷の小按司とよばれた尚巴志が与那原で異国商船から鉄を賣り、百姓に与えて農具を作らせたという。

乾隆元年(一七三〇)には南風原村(現大里村)の間切番所が当村に移されている(同書尚敬王二四年条)。同五年には湊の海面が三丈五尺ほども上がるという潮水異常が発生した(同書尚穆王四年条)。ほかにも諸社公用の雜物などを装載した船の入津の記事がある(同書尚灝王二四年条など)。

当村の浜は聞得大君の就任儀式である御新下りの中継地として知られる。大君が久高島(現知念村)に行幸する際には当村に御物奉行官が派遣されていたが、康熙六年(一六六七)からは大台所役人が督理することになった

由来記によると高宮城ノロの崇所として真境名之巖・大瀬森があり、年中祭祀として真境名之殿で稻三祭が行われ、地頭から供物が出された。一八八〇年の戸数五二・人口二二四(県統計概要)。一九〇三年稻福村とともに大城村に合併。

### 与那原町

面積四・四五平方キロ

沖縄島南部の東海岸、島尻郡の北端に位置する。南は佐敷町・大里村、西は南風原町、北は中頭郡四原町に接

し、東は中城湾に面する。地形は中城ドームによって中城湾を取巻くように発達した急崖に囲まれる。南に隣接する大里村の大里グスク(標高一五五・一メートル)がある台地から延びる雨乞森(標高一三三・六メートル)と北西にそびえる運玉森(標高一五八・一メートル)の間にあって、中城湾に面して海岸低地帯が広がる。与那原海岸は一九九六年(平成八年)からの中城湾港マリン・タウン・プロジェクトが各地を結ぶ。

大半が第三紀島尻層群の泥岩・砂岩からなり、丘陵の頂部は琉球石灰岩が覆っている。那覇を発した国道三二九号が島尻をほぼ一周する国道三三二号と与那原交差点で合流し、名護市に向け北上する。同父差点の交通渋滞解消を図るために三三九号と那原バイパス事業が進められている。ほかに主要地方道糸満一与那原線(県道七七号線)

によって埋立が進行し、新しい字の東浜が成立。地質は

200 田中啓介

◎ 親川 現与那原町与那原

5

沖縄県  
人綱引な  
宇那原の  
る。現  
幅三メー  
洪ノ御  
与那原  
浜ノ御  
御殿山(

で遊んでいると、天から二つの光の輪が下りて  
変じた。一人は紅衣、一人は青衣をまとつてい  
るが近づくと天神は井戸から出てきて樹上に登  
り、一衣装を振り、もとの二つの光の輪に変じて昇天  
する歌で、「与那原の親川にあまりしやる乙女 やが  
ての近くなたさ」と「与那原の親川に天女が降りたよ、豊年

(現南風原町)。ウーネナバル村・イーヌナバル村とよぶ。絵図郷村帳に島添大里間切上与那原村とみえるが、琉球國高究帳には記載がなく、「琉球國由来記」に大里間切上与那原村とみえる。高究帳では与那原村の高頭四八〇石余に含まれていると思われる。間切集成図には与那原村と一村のよう描かれている。集落内には樋川や井の印が描かれるが、樋川や井の文字はみえない。海岸には「たつはな瀬」の岩がみえる。当村を領した地頭職は初め上与那原を称するがのちに仲村を名乗る。地頭職には康熙四四年(一七〇五)に向氏上与那原親雲上朝克がいる(『中山世譜』附巻)。明治六年(一八七三)の上与那原地頭職仲村親雲上の家禄は三〇石・物成九石余、当村からの作得九石余(琉球藩雑記)。前掲由来記によると与那原ノロの奉所として上与那原ノ嶽があり、年中祭祀として同嶽で三月・八月に四度御物參の祈願、上与那原巫火神で稻穂祭三日崇が、クハンガノ殿で稻二祭が行われた。同殿には地頭から供物が出された。一八八〇年の戸数一二四・人口六三九(県統計概表)。一九〇三年の戸数六五・人口二九三、うち田六反余・畠三三町四反余・宅地二町六反余(県統計書)。

板良敷村(ばらしきむら)  
与那原町板良敷(ばらしき)

与那原村の東に位置する。北から東にかけて海に面し、南は佐敷間切津古村(現佐敷町)。イチャナジチ村とよぶ。事々抜書に与那嶺村が記され、板良敷村のことである。絵図郷村帳には島添大里間切「いたら敷村」と与那嶺村と二村の名がみえるが、琉球國高究帳には同間切に与那嶺村だけが載り、「琉球國由来記」では御嶺の項に与那嶺村、年中祭祀の項には板良敷村のみがみえる。与那嶺村は享保二年(一七二六)には「當時無之」とされる。兩

眞昭摸  
米記に  
之獄で  
見武之逆  
饒田之逆  
大見武之  
れた。  
大見武  
現收高  
表)。一  
運玉森

前述の道筋が大里と首里によつて整備さ  
れ、『陽』尚育王八年条。咸豐一〇年(一八六〇)人數が増  
加する理由に手良佐原に移つた(同書尚泰王二三年条)。

村は初めは別々の村であったが、のちに与那嶺村は板良敷村に吸収されたと思われる。琉球国高究帳によると与那嶺村の高頭一六七石余、うち田一二九石余・畠三七石余。間集合成図には与那原村の本番所から佐敷間切へと続く道筋に沿つて板良敷村が描かれている。道沿いの海岸側に井がある。佐敷間切との境は「すむむ瀬」の上を卯上小間左に当てて海方切が引かれている。当村を領した与那嶺地頭職は板良敷を名乗つた。馬氏七世馬文彬板良敷親雲上良運が任じられ(「氏集」・馬姓仲程家家譜・廢藩の頃は向氏板良敷朝英がいる〔家譜資料〕那納市史など)。明治六年(一八七三)の与那嶺地頭職の板良敷親雲上の家禄三〇石・物成九石余、与那嶺村からの作得三石余(琉球藩雜記)。前掲由来記によれば西原ノロの墓所の一つとして与那嶺村に与那嶺ノ嶽がある。また年中祭祀として板良敷村に西原・与那嶺両ノロの崇所として与那嶺之殿・上マンノ殿・名嘉真之殿・島内之殿・名嘉地之殿があり、そこで稻二祭が行われた。与那嶺之殿での稻二祭には地頭からも供物が出された。一八八〇年ののろくもい役俸によると与那嶺のろくもいの作得は米一石余・雑石一石六斗余、現収高米五斗余。同年の板良敷村の戸数一二六・人口六六八(眞統計概要)。一九〇三年の戸数一七〇・人口九二四、うち土族戸数九三・人口五六〇。反別は一〇六町三反余、うち田五町余・畠六九町三反余・宅地六町四反余(眞統計概要)。